



テ○ラァを列車痴漢で電マ
失禁中出しで救う方法

いやっ

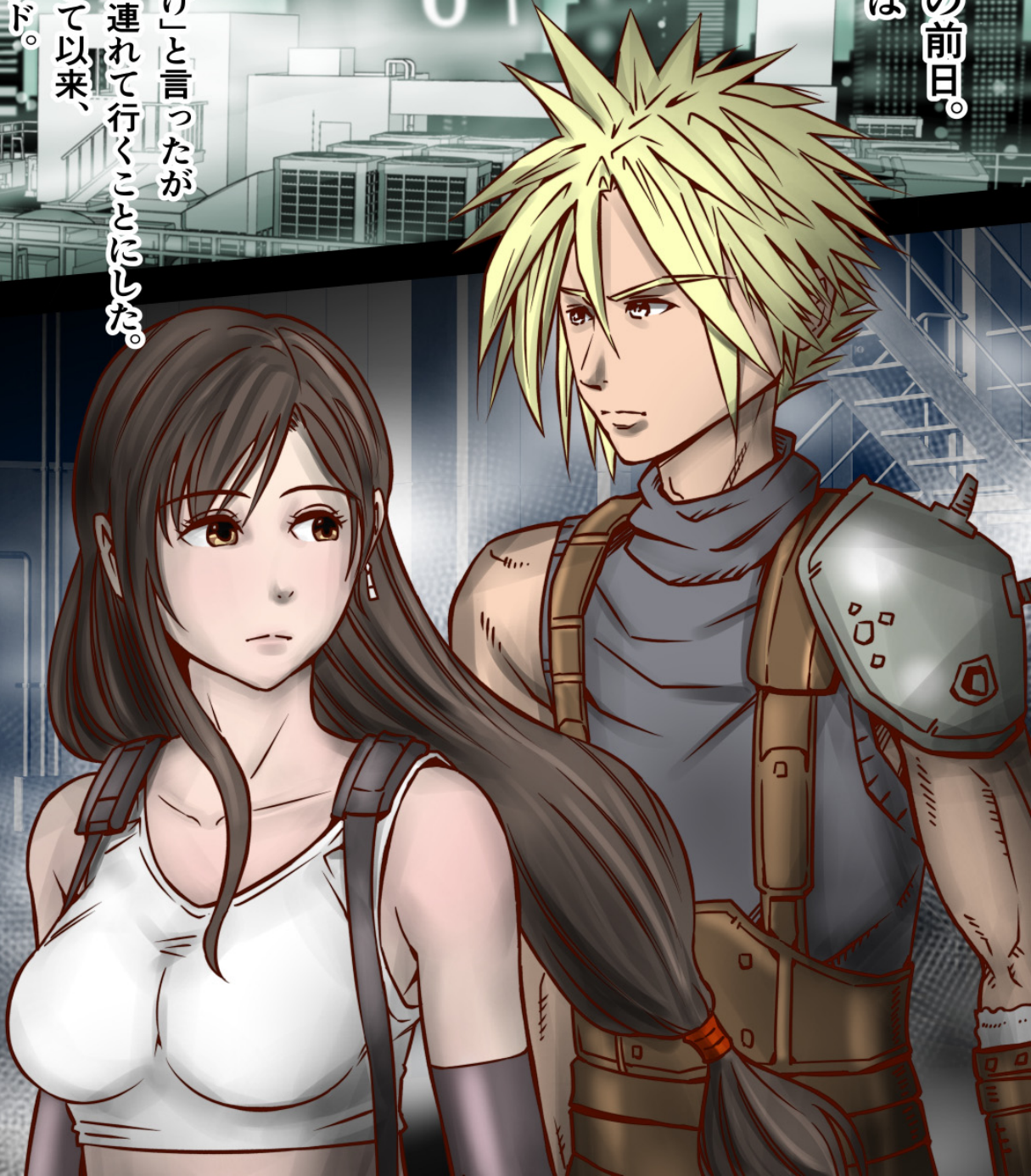
くやしーいっ

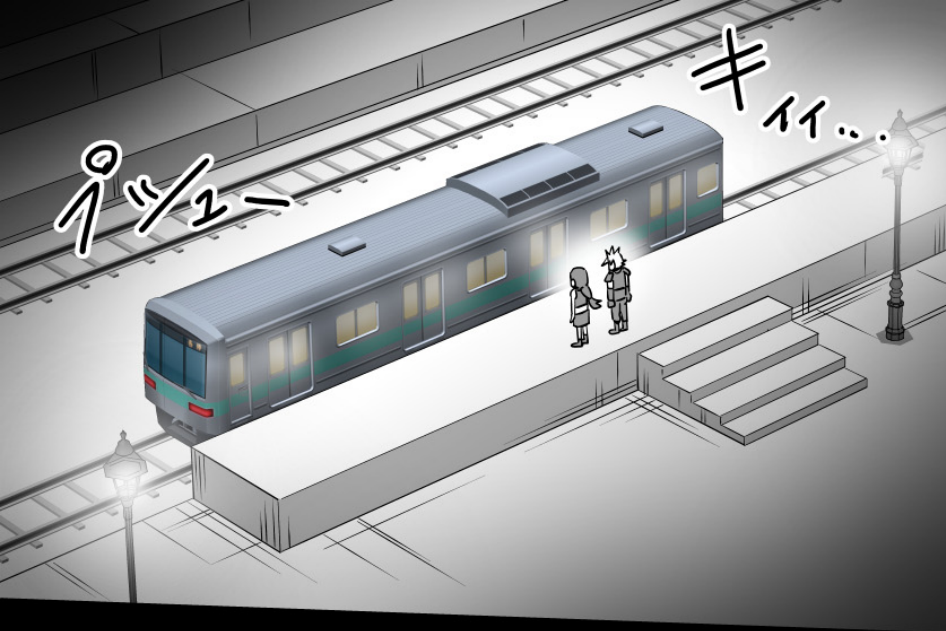
ビクン

ビクン

壱番魔晄炉爆破作戦の前日。
ティファとクラウドは
魔晄炉の偵察のため
上層部に向かおうと
していた。

パレットは「一人で行け」と言ったが
ティファはクラウドを連れて行くことにした。
先日数年ぶりに再会して以来、
どこかおかしいクラウド。
彼を一人にしておくのは不安だった。
今日もどこか上の空のようだ。





二人は上層部行きの列車を
スラム街の駅で待っていた。
するとそこにやってきたのは
見慣れない箱型の列車だった。



一両編成の
車両の中には新羅兵が
ぎっしりと乗っていた。

(まずい…)
ティファは思った。通常の上層部行きの
列車ではない。
なにか軍事行動中の車両かもしれない。



ティファは
一瞬、引き返そうかと思ったが
すでに新羅兵の目の前にいる以上
不審な行動をとることはできない。
(ここはおとなしく乗っていこう。)

(大丈夫。
私とクラウドが
アバラランチのメンバーだと
いうことは知られていないはず。
おとなしく一般市民を
装って上層部までやりすごそう。)

うう…！

大丈夫？
また頭痛の
発作なのね

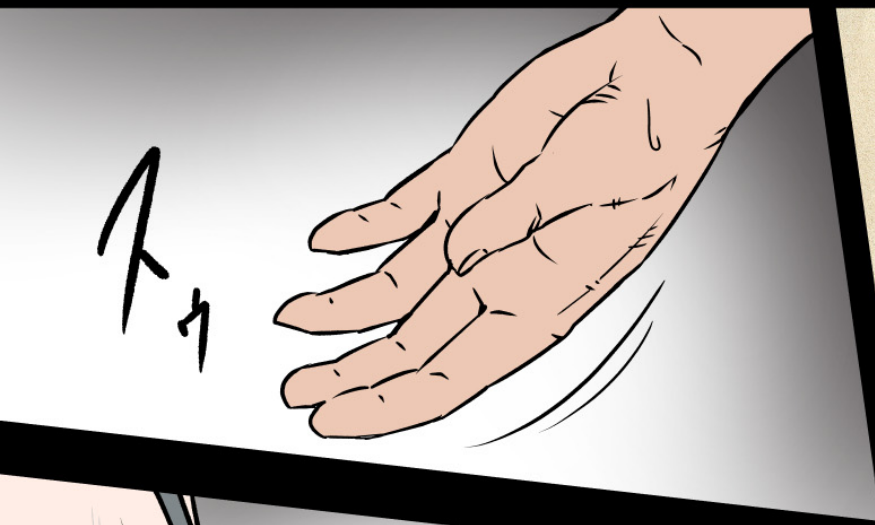
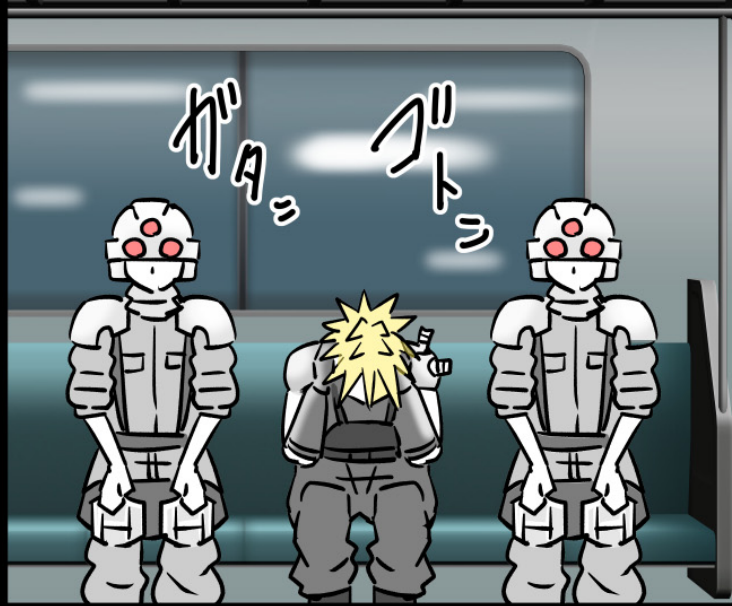
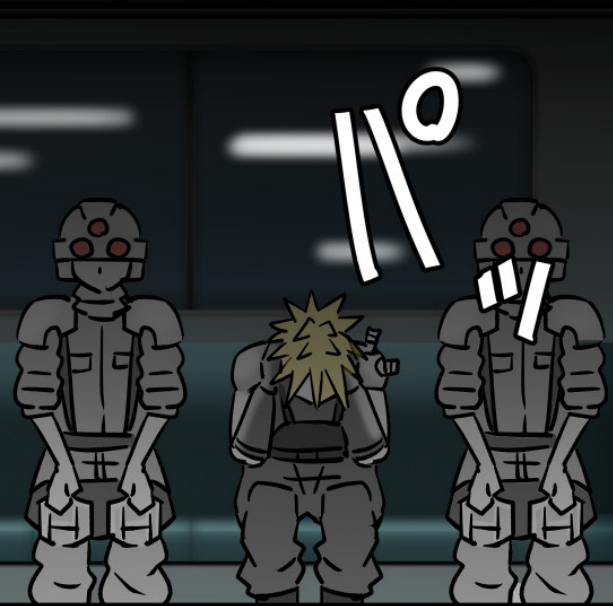
君たちどうした
大丈夫か？
ここに座らせると
いい

あ…
ありがとう
ございます

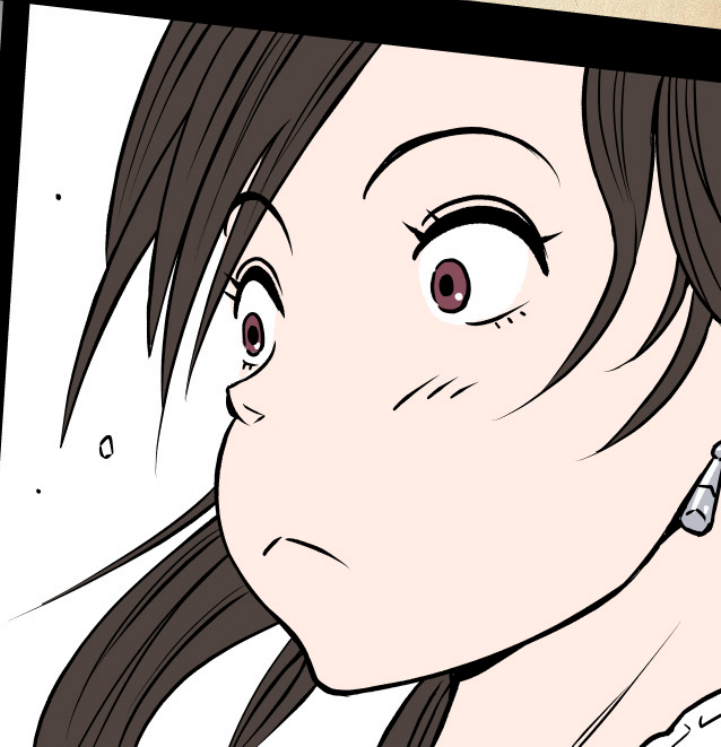
列車に乗ってすぐ
クラウドは頭痛を訴えた。
クラウドは病気なのかもしれない。
彼を偵察に連れてきたことを
ティファは後悔した。
(ここで目立ってはならないのに…)

新羅兵の中にも
親切な者がいるのだ。
(彼らも私たちと同じ、
元はただの
ミッドガル近隣の住人なんだ。
明日の作戦で
彼らの何人かの命が
犠牲になってしまうだろう。)
そう思うと
ティファの胸はいたんだ。

だがこの新羅兵こそ
次元世界を超えてきた
浅岡健也その人であった。



クラウドを座席に座らせた途端
車内が暗くなった。
これは上層部行き列車内で
ID検査をする際に車内電力が
不足することが原因で起こる
ミッドガル住人には
おなじみの現象だった。



なに？え？

これって…痴漢？

ジェシーの言ってた痴漢…！？

ID検査中に痴漢がよく出ると
アバランチメンバーのジェシーが
言っていたことをティファは思い出した。

いやだ！

だんだん

前の方に来てる…！

クニ

クニ

クニ

騒ぐわけにはいかないけど

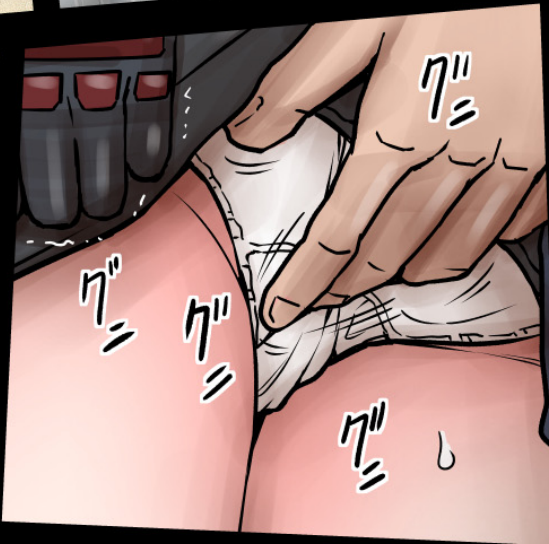
いくらなんでも…っ

我慢…。
ちよつと気持ちわるいだけ。
もうすぐ明るくなれば
きつと止めるはず。



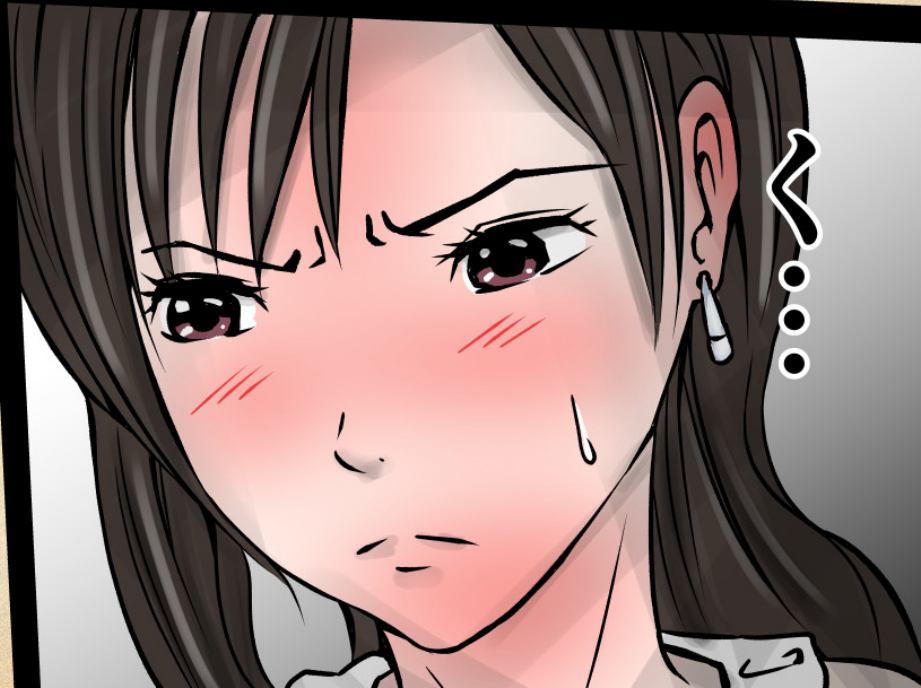
明日の爆破作戦の前に
妙な騒ぎを起こすわけにいかない。
ティファは必死に耐えた。

ID検査によって
照明が暗くなるのはいつも
ほんの数秒だった。
すぐに明るくなるはずだ。
しかし今日に限っていつまでたっても
照明が明るくなることはなかった。



その間にも新羅兵の
指はティファの肛門を下着ごと
じっくりと揉みほぐしていく。

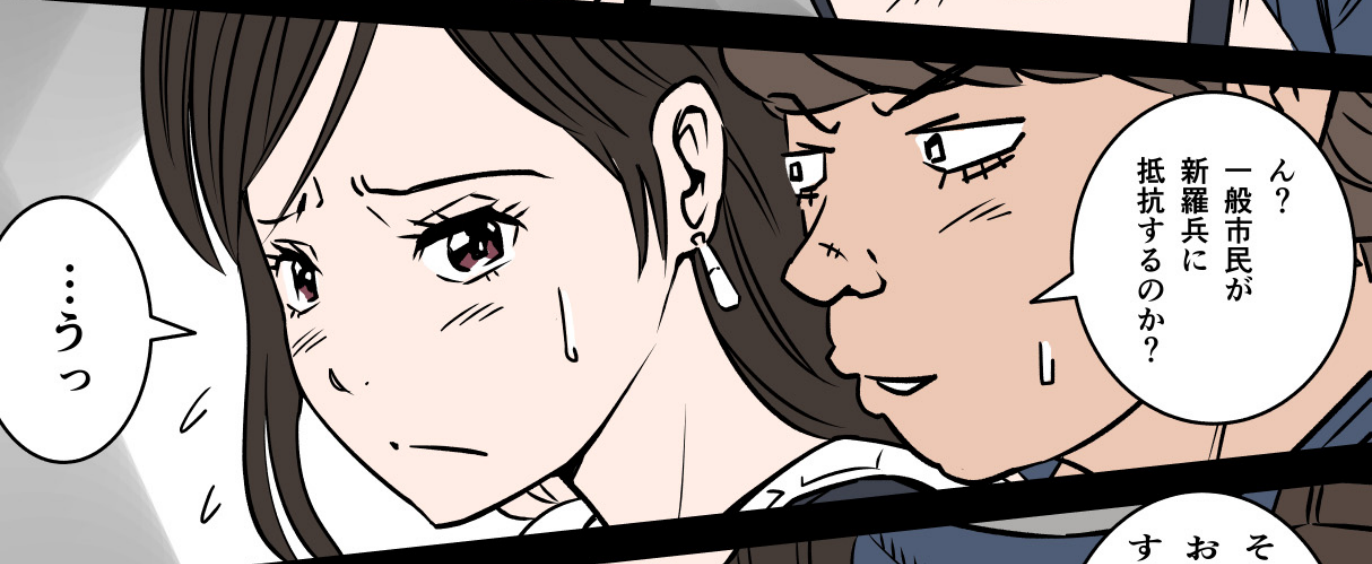
悔しさと恥ずかしさで
ティファは真っ赤になった。



ちよっと！
いい加減に…！

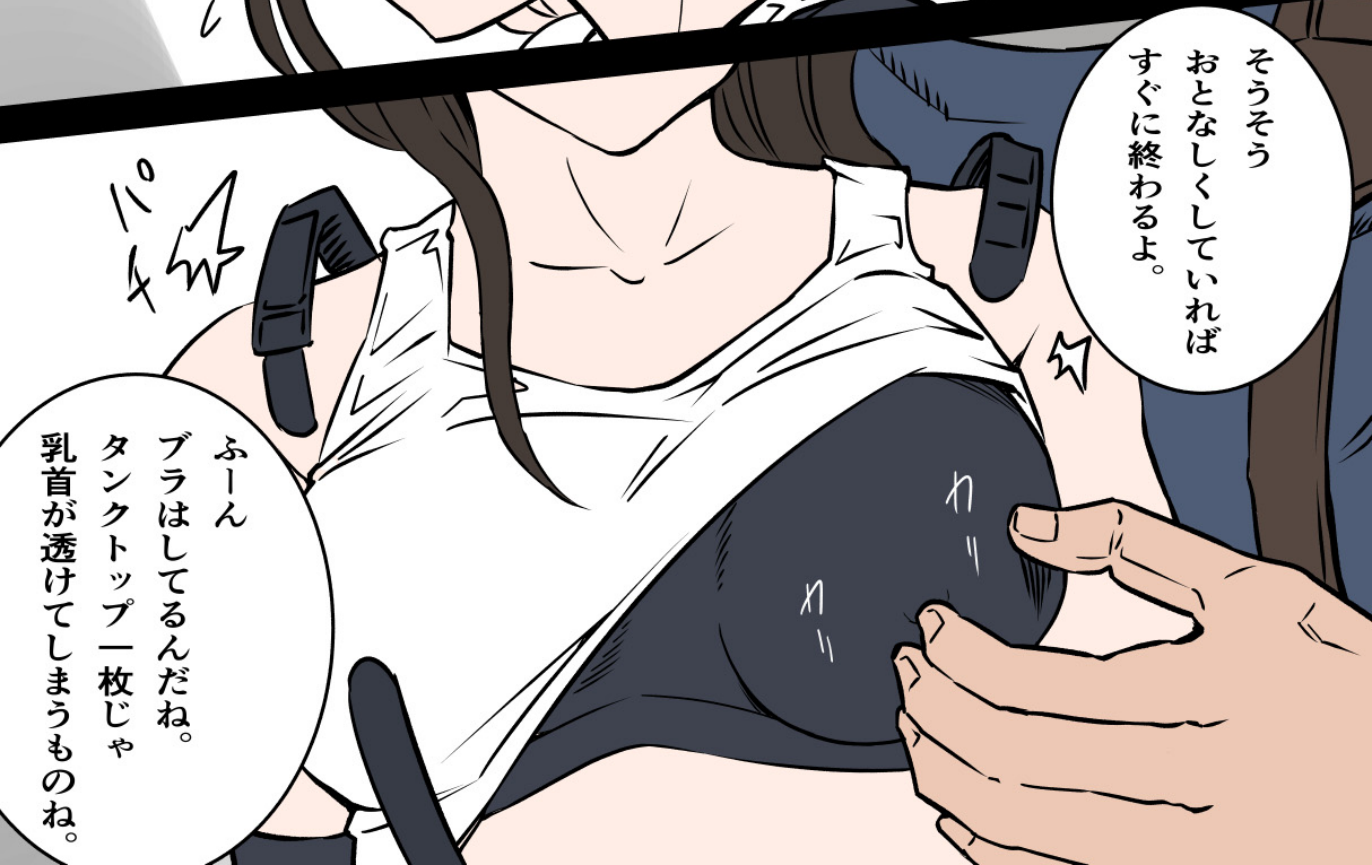
！！

ハキ
ク
ク



…うっ

ん？
一般市民が
新羅兵に
抵抗するの？



そうそう
おとなしくしていれば
すぐに終わるよ。

ふーん
ブラはしてるんだね。
タンクトップ一枚じゃ
乳首が透けてしまうものね。

ハキ

ハキ

ほら、右の乳首と
比べてごらん。
ずいぶん大きく
なってしまったね。
恥ずかしいねえ。

あれあれえ？
左しかいじってないのに
右の乳首も
大きくなってきた
みたいだよ？
おかしいなあ。



最低！
最低の痴漢！
痴漢って最低だ！

さつき同情したのが馬鹿みたい
新羅兵なんて全員死ねばいい！